

# 霧島火山新燃岳の火口内の変化 -2011年2月～2012年1月-

及川輝樹<sup>1)</sup>・川辺禎久<sup>2)</sup>・中野 俊<sup>3)</sup>

2008, 2010年に小噴火を繰り返してきた霧島火山新燃岳は、2011年1月26日に約200年ぶりに軽石を噴出する噴火をおこし、その軽石を放出する準プリニー式噴火は27日まで続いた。その後は火口内に溶岩が流出し、2月1日までに火口内はほぼ埋めつくされた。2月1日からはブルカノ式噴火ないし火山灰を放出する噴火活動に移行し、爆発的噴火を頻繁に繰り返したが、2011年9月7日を最後に現在(2012年6月)まで噴火は発生していない。本稿では、火口内に溶岩が流出した直後の2011年2月、爆発的噴火が頻発した後の2011年3月、活動から1年がたった2012年1月の火口内の様子を空撮写真によって紹介する。なお、2012年1月の写真は霧島ネイチャーガイドクラブの古園俊男氏にご提供いただいた。ここに記して感謝いたします。



写真1 南西から望む新燃岳(2011年2月3日)。1月26～27日の準プリニー式噴火の堆積物が堆積している部分が灰色となっている。



写真2 2011年2月3日の新燃岳火口内の様子(西南西上空から)。火口内に溶岩が出現したばかりで、綺麗な溶岩しわが見える。火口外側には火山岩塊の衝突跡と考えられる浅いクレーター状のくぼみが見える。

1) 産総研 地質標本館  
2) 産総研 地質情報研究部門  
3) 産総研 地質調査情報センター

OIKAWA Teruki, KAWANABE Yoshihisa and NAKAO Shun (2012)  
Topographic changes of the crater of Shinmoedake, Kirishima  
Volcano, Feb. 2011 to Jan. 2012.





写真3 2011年3月11日の新燃岳火口（西側上空から）。  
2011年2月の噴火により、火口内溶岩上に火口が形成され噴出物が厚く積もっている。中心から上がっていた噴気がなくなっている。火口外側には衝突跡が認められる。



写真4 2012年1月17日の新燃岳火口（霧島ネイチャーガイドクラブ 古園俊男氏 撮影）。  
西側上空から撮影。気温が低いせいか噴気が目立つ。火口縁近くの噴気が活発な場所が北側に移動している。火口外側斜面において、ごく浅いガリー浸食が認められる。（この写真はGSJ地質ニュースへの掲載に限って使用許諾を受けており、CC-BYの対象外です。©2012 Toshio Furuzono）